

「最近の立教大学学生の心理的特質と 全カリ英語教育の理念」

～英語教育研究室FDセミナー講演（2005.4.2）から～

大野 久

I. 立教大学の学生の様子

本学の教職員の皆さんの間で、話題となる最近の学生の特徴として、「大人しい」、「元気がない」、「自信がない」、「積極性に乏しい」、「発言しない」、「質問しない」、「意見が言えない」、「指示されないとできない」、「指示されてもできない」、「人の目を気にする」、「人とコミュニケーションを取ることが苦手」などなど、多くの特徴が指摘されています。

このようなことは、私が専門としてゐる青年心理学の研究者の間でも多く語られていることで、本学の学生だけの特徴ではなく、現代の若者のかなり一般的な特徴と考えられます。

II. 最近の日本の青年の特徴

いま社会で話題になっているニート現象、働かない、働けない、働こうとしない85万人の若者たちの問題も、上述したような若者の特徴と同じ根を持った問題と考えることができます。ニートと呼ばれる若者たちの仕事をしない理由を彼らにたずねると、「自分が本

当にしたいことが分からないから」、「自信がないから」、「上司とうまくいかないから」、「したくもない、おもしろくもないことを、安い賃金のためにがんばれない」などの答えが返ってくるといわれています。

これらの答えは、まず第1に、本来、青年期で育つはずの「アイデンティティの感覚（自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感の総称、もしくは、自我の感覚）の希薄さ」が、「自信がない」、「自分が本当にしたいことが分からない」という表現になって現れていると思われる。

第2に、社会で人の中で生きていくという適応能力、調整能力、いわゆる「社会性の低さ」が、「人とコミュニケーションが取れない」、（これは自我の問題とも深くかかわっていますが）「忍耐できない」、「頑張れない」という形で現れていると思われる。

この2つの問題は、上述した本学の学生の特徴を説明する共通の原因としても考えることができます。

加えて、現代の若者の特徴として、「評価懸念」をあげることができます。

この評価懸念とは、本来、自分自身に自信が持てないため、価値判断の基準を外に求めるゆえに「人からほめられたい」、「認められたい」という心理動が根底にあるのですが、そのために、非常に「他者の目を気にする」、その派生した形として、「自分以外の人から褒められることに敏感」、転じて、認められたいのに「目立つといじめられるので目立ちたくない」「人と同じでいることが重要」などの形となって現れてきます。

Ⅲ. エリクソンの漸成発達理論からの説明

アメリカの自我心理学者、エリクソン (E.H.Erikson) の漸成発達理論 (Epi-genetic theory) の中から、人格発達における初期成人期までの大切な要因を取り上げてみましょう。

まず第1に、乳児期に母親的存在からの愛情によってはぐくまれる「生まれてきてよかった、大丈夫、安心の感覚」である「信頼感」を獲得すること、第2に、早期幼児期 (1, 2, 3歳頃) に、自我 (意志) の現れである反抗期とともに、自尊心を傷つけられることなく、自分の衝動を自我 (意志) の力でコントロール (我慢) する能力、「自律性」を獲得すること、第3に、遊戯期 (3, 4, 5歳頃) に、遊びを通じて、自分の意志を実行する力、構想力、企画力である「主導性」を獲得すること、第4に、学童期 (6~12歳

頃) に、さまざまな体験を通じて基本的な技術や社会のルールを学ぶことで、この社会で一人前にやっていけそうだという自信である「生産性」を獲得すること、第5に、青年期に、いくつかの選択肢の中から、自分の意志で人生を選びとるという「アイデンティティ」の感覚 (自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい) の獲得、最後に、初期成人期に人と本当に仲良くなる能力、無条件に人の幸せに配慮できる愛する能力である「親密性」「ケアの感覚」の獲得が重要であるといわれています。

簡単にまとめると、人格発達において重要なのは、自分は十分に愛されている、何があっても大丈夫という自信、自分は何とか一人前にやっていけそうだという自信、自分の選びとった人生に対する自信、それらの「自信」と、それを獲得したあとに来る他者への配慮、「愛」の獲得ということになります。

Ⅳ. 人格発達を疎外する子育て・教育の問題

このような理論を踏まえて、わが国の現状を振り返ってみると、まず、信頼感の発達を阻む結果を生む、「～しないと、お母さんはそんな子は嫌い」と親が愛情に条件をつける「条件付きの愛情」、次に、主導性と自信の発達を阻む、「バカね、ダメでしょ、早くしなさい」という親の言動に象徴的な

「バカダメ教育」、さらに、社会的経験、人間関係能力の発達を阻む、「いいの、あなたは何も考えないで勉強だけしていれば」という言動に象徴される「学歴主義、効率主義」の風潮の蔓延によって、若者たちの人格発達が大きく疎外されている現状に思い当たります。

こうした現状の中で、現代の若者たちは、愛されないという不安感から、人の評価に過敏になり、否定的言動を受けることで自信を失い、また、さまざまな経験をする機会を奪われることで、幾重にも自信を失っている現状が理解できるような気がします。

V. 現代の若者を取り巻く状況と全カリ英語教育の理念

さて、本学の全カリ英語教育の目指すものについて、「単なる英語運用能力ではなく、自分の意見を異文化に発信できることと同時に、異文化の立場を理解できることによって、真の異文化能力を目指すこと」であると、これまで何人かの英語担当教員の方から教えていただきました。

ここまで述べてきた現代の若者の特徴と、この全カリ英語教育の理念を、対応させて考えると、思いがけず重要な対応関係があることに気づきます。つまり、異文化に発信すべき自分の意見とは、自我が育ち、自信がないと十分に持ち得ないものであり、異文化の立場を理解できることは、相手の立場

になって考えることの出来る、配慮、愛の能力のことといえます。さらに、このことを実践的に具体化するためには、文化を越えた高い社会性も必要になることでしょう。

したがって、全カリ英語教育の異文化能力に関する理念は、現代の若者の人格発達を促すために、彼らの最も苦手とする部分をきちんと伸ばしていこうという教育理念にいみじくも一致しているといえます。

VI. 学生への対応についての提案

自明のことというお叱りを受けるとは思いますが、こうした考察から、以下に、ささやかな提案を書いてみたいと思います。

まず、「自分の意見を持つことはよいこと」、「自分の意見を発信できることはよいこと」、「人の意見を聞くことは大切なこと」、「人の立場を考えること、考えられる能力を持つことはよいこと」という理念の伝達が大切だと思われれます。

次に、何人かの教員の方からうかがっていること、「本学学生は高い潜在能力を持ち、（たとえば、自分の意見をいっても恥をかかずにすむような）状況さえ整えば、十分に力を発揮する」という意見から推測して、学生の現代的特徴の多くは、これまで、多くの経験する機会が奪われていたことと、意見表明を押さえられていたこと、もしくは、意見について否定的評価にさら

されていた過去の経験によるものであり、実践を含む教育を通じて、自己の意見表明や、相手の立場も考えたコミュニケーションの実践に対する肯定的な評価を得る経験で、自信を回復しうる可能性が大きいと思われることをお伝えして、教育実践の中でこうした可能性を試して頂きたいと考える次第です。

おおの ひさし

(本学学校・社会教育講座教授、
本学大学教育開発・支援センター副センター長)